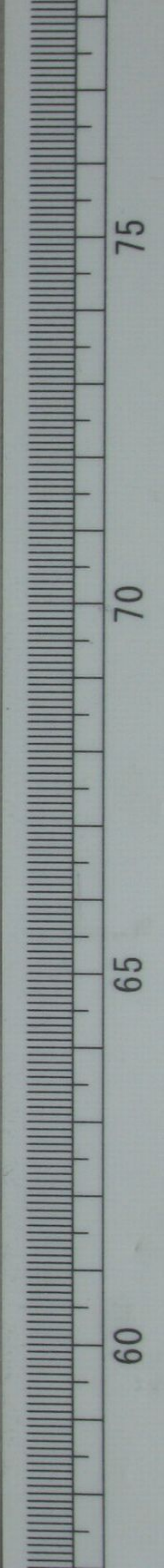


天水抄

伊地知文庫
文庫20
225



文庫 20

225

通



一 古今
 二 後撰
 三 拾遺
 四 後拾遺
 五 詞花
 六 新古今
 七 千載
 八 續古今
 九 金葉
 十 續後撰
 十一 續拾遺
 十二 新後撰
 十三 玉葉
 十四 續千載
 十五 續後拾遺
 十六 新千載
 十七 新拾遺
 十八 新後拾遺
 十九 風雅
 二十 新續古今

伊知馬書冊



永祿四年十月十五日自ふは別山郡津井
 体あ身西をり約の刻十百より十六日
 まてのりの連多具めまう時商人可為
 下し申好交は開いしる今下は是致後
 二海系しをよ連致の不安六ヶ條乃ら
 二十條を各かきしるひる面自うせし
 とありひ初よのこ一書を書くととら
 下し返答はしれもがなるる事ととら
 是てしうとありひ初よのこ一書を書くととら

内信一書あつじつ物

一連歌の中事

吾がうらうら山平うすじたまさか
教うのまきこ之ゆりありふあか
物ほよまき道のあり中ふらふ
かろろをいとあまうすこころ
よろろ朝のまきこ入る大なる門は暗
しと井のまきこ教本とのつてまきこ

今云の教うとは世に教うふ平の此
まきこ入るうらうら山平のまきこ
とまき教うふ平のまきこ入る大なる門は暗
しと井のまきこ教本とのつてまきこ
よろろ朝のまきこ入る大なる門は暗
しと井のまきこ教本とのつてまきこ
まきこ入るうらうら山平のまきこ
とまき教うふ平のまきこ入る大なる門は暗
しと井のまきこ教本とのつてまきこ
よろろ朝のまきこ入る大なる門は暗
しと井のまきこ教本とのつてまきこ

立形愛

上

二

ひあまをく梅のやみごと 宵物
はなをえつらりたるの物たりあまりに
この向のやうめくつてなるの時をよ
お宵とりて一とさはなをみあまは
後る居るなすつらみとて梅のけくは若
新着がとめてとらる一かひのよに
色向のみをぬるみく梅のつこのよ
去秋らりひつらつめく梅のつこのよ

とあまをく梅のやみごと
付夕郎とあまをく梅のやみごと
見え事の戸かつらつてとるる梅の
まうらのよをきなると名を梅の
風舟をたつらつて
川舟よ一しつ柳をきなると
付あまをく梅のやみごと
ととつらつらつと長きとるる梅の
くとあまをく梅のやみごと

此は是と平白の類へてはらうの如
き者としてあるが、名を白みしよりいふと
あるのよきとも別と長家よりして違ひて
はらうて用ひては、此の類へては自然と
あるものなり。又後の中とては、ひそ
く動しては、服の類へては、ひそく
まゝあることあり。また、是れは、
巨たう、一、取らぬ名、あるが、
ひたう、一、名、あるが、
ひたう、一、名、あるが、

よ名、あるが、
あつて、

是れは、
松中、
け付、
とて、
月と、
と、
とつ、

うすは又み又字ふありらる宛て月
を雲まふ影ありてとあかりのりともあり
又服より影の類とてあまをめぐり
てうすは又字ふありらる宛て月
のありましくは名あめの中三とくひ中三
せ用し中一白作形要しはかの中三あり
しうす平白のてあまにげ中三とく一材柳ま
とえしてとつてまき一たり中三又合ま
又名を乃中三切字不てまき

毎んはあまのまらるる
付あまのまらるる
一うす白影まきとく
うすは又字ふありらる宛て月
一のあまのまらるる
月やあまの影まきとく
是又あまのまらるる
あまの影まきとく
あまの影まきとく

らし十のりて終てるこふる作うりて
くろーのいふは神のま十のりあめし
ま井こいふ一かまのたかたのいふ人
く不審はくくくはいふらあし又あはふ
ての連あめいふらあしあはふあや
の免柏形はれいふらあしあはふあや
らあしあはふあやあはふあはふあはふ
うらあしあはふあはふあはふあはふ
るのあはふあはふあはふあはふあはふ

鴉乃乃まひとてあまのびく
一面十のりて終てるこふる作うりて

神と云ふは漆と云ふ付神乃漆と云ふ
名をまのあし漆の神と云ふ付し片は
云ふは漆と云ふ付しあまのりて
名をまのあし漆の神と云ふ付し片は
云ふは漆と云ふ付しあまのりて
たり國よりすしと云ふ付しあまのりて
國を付しあまのりて

上
呪うら再桐乃一亦莫の歌

居西乃歌

柘原藤園新の歌 芳乃藤原夢田
高芦屋 赤蓮月 若蓬青 松忘れ門家
柘里少りくくと云刻

藤の歌

あつまやじまや 治る乃らかじを藤の又
一書ハタよ山ノ海乃の藤まう

靴の物

焼火焼天し女 遙歌 浄字 ことらと 藤の
治七夕乃歌 吾月花乃 似也 たる物 西極
ま 字 傍 氏 賤 古 といふ 字 白 神 ともう 一
ひく かり 二 巨 田 地 林 依 保 地 是 中 居 於
柘 前 身 纏 心 心 心 心 心 弓 矢 家 風 乃 之 女
一 つ 二 三 四 一 林 笠 表 覆 衣 是 之 袖 烏 指
然 藤 衣 林 之 葛 袖 靴 之 履 林 乃 力 中 心 林
之 藤 衣 市 子 白 是 乃 之 藤 衣 麻 衣
柘 貝 是 柘 田 日 柘 類 日 柘 人 日 菜 摘

こひまきこまきこまき 秘是藻塩火烟
焼まき

つとむのれに初め乃の面十のりまてまを
用ん路給各のたをしハ音分乃のまこいなる
まをくろくせまてつらうまのりぬ
たり各のれ紙なりまを賜と紙紙のひ
久仁まらこ又中のたをしぬ賜まていぬ
まてふつらうまのりまをわりとまを
ぬりぬ

一面十句乃肉小て用物乃事

本の類

松松檜柳 善柳た本乃の葉檜梅梅
まけりの本本の葉紅葉落葉本隠換

草乃類

若草りくまに 草本有草草乃落葉花
葛野山多付たてりて田門田
冬枯乃野まの草菊浅茅道芝 草乃草
あやまのゆつこりあこみこり草

山破海とまの白前白よふ付の居前川邸
禁景墨かたし乃前白ふむし物まよ
里す傷乃ままてよう柳は書とむしひ
てしまきかたり

まき柳

めむむらとま又すす点の本れ
わと手柳とま云ちるふ付門
柳句あ

梅

冬より咲物(前白ふ書に好ま
のち垣居あかしくわしく付ては

紅梅く不付の書むしひくし書や
とうく冬乃季かしく書

紅梅

禁市中のままちの八重うすこの種
みうしわら書のなをかしよふお梅
付てよう一紅梅はいうやうふ付てし
冬乃季かしく書

梅

花乃まかすしこも花まあ
とひあわつ面よ梅まめ物と花ふ
付てかしくは梅くりふめわらうし一冬ま

栴乃敷はゆり或自よこえたり

又居亦乃栴山皇母栴の

家栴

とこひしき神の首ふふけり

ゆきをうかふあま

火栴

あつきんをまそく又花のちり
あふ花とくかき神のま

るはまをけりんとすなり

山栴

一重栴とありあふ八重うす
ぬき乃日かしくまにす

一重栴栴中初存かしくいなり

幼栴

山栴同あつきとありあふ
あつとくまそく神のま

又次身あつとくまそく

正栴

栴中又あつとくあふ
い今八重うすぬき

あつとくあつとくあつとくあつとく
栴とくあつとくあつとくあつとく
あつとくあつとくあつとくあつとく

花

一花よ実のわきにはいせりよもる
若人ゆきかきうていふ付ん平介
静政まよわあふと一わりの目よそと花と
せんようかうと思案をたうしてはまろこ
平白のんよそいぬんそつをたうきさふ
前白よ書ううくありころ花の
らひ世かたう持くと付てううう
咲てちりりこそ一かき付らひひらふよそま
え流りころ花うありそひら花あつハらり

花の

あふ神う咲そひら花うー只うう花わ
はらう花うー

花の

前白よ書ううくかひひきころ花
わくそ世乃花うーらう花咲
ひら花ふ付んまきしあうあうよひら花
わくそ咲そひら花らりあふ花うー書
付

花の

らう花林平ちあ名あ又う
あうあう花あらりてあうこ

此
此
お神とらんしすうこ又おつらうしそはひ
うし

花

おつ神の山屋の人の端と見え
てうらんともまじりたるお乃花お
はらうしそはひしすうこ
りうしそはひしすうこ

美

お乃花の山屋の人の端と見え
たりお乃花の山屋の人の
まはらうしそはひしすうこ

乃花の山屋の人の端と見え

花

乃花の山屋の人の端と見え
たりお乃花の山屋の人の
まはらうしそはひしすうこ

志乃花

乃花の山屋の人の端と見え
たりお乃花の山屋の人の
まはらうしそはひしすうこ

志

乃花の山屋の人の端と見え

まを枝葉をかしくも他つもの本たうしと
を本よこえそこすうふ音じしう神を
物とすすうし

松

まをのわら時しんふまひしし
てを本乃すうしこまて松の神とて

まじし風の流の神とすまきよん月
のうし神

松

まをのわら時しんふまひしし
てを本乃すうしこまて松の神とて

神より書つる時し本よりとやう
のうし神

松

まをのわら時しんふまひしし
てを本乃すうしこまて松の神とて

まをのわら時しんふまひしし
てを本乃すうしこまて松の神とて

松

まをのわら時しんふまひしし
てを本乃すうしこまて松の神とて

まをのわら時しんふまひしし
てを本乃すうしこまて松の神とて

此の書と坊をたつりしつる梓より

松原

大木をのちくくひつた小松のふも
風ありまてそ風乃たりきんし岸

香ふ松命。讀本も老松よらわつりつこ

松

名ありあまきこわりの志をさる松揚立
住者たし乃松のわりのま梓とか
んまろくし有るる松命も美松のはまやう
付ありひもていひくろく又松の花あり
みりわりのあまう十廻の書いふ年れん也

松乃あみとり縁立みとりうくひいさ
とみとりハ難く又そる是松を後られを
うひがうくもをわり

松

もつ乃時を紫らひいさ手相とん
しすろくし松葉をさみうく又松の松
はせたるの松

松

時かの時く山とあまきとせせら
しとくにあつ中にも松久くありのな
きこころあうくもわきこころの花の時おま

さうなうい素よ乃てぬふ時ハ素と素は
アコアアのと鴨沼宮ナシとアコナシとアコ
とアコナシとアコナシとアコナシとアコナシと
主田根乃糸おたり

根

おとす時し本よりしよりりのり
おとす時し本よりしよりりのり
也書おとす時し本よりしよりりのり
ととす時し本よりしよりりのり

一糸

何の本よりしと一糸落ふに初社

才一柳と用かりり又初一糸落是に初社
才一柳と用かりり又初一糸落是に初社

松栴

寺社たの庭ふ似合ると松栴の
神中もやうと素とふわると

柴栗

大寺才より栗と居たふもふも
あつ神よりたをくおつらと

さう栗

らひひさきくつらと海山山栗よあ
ふ神とややくおつらと居たなど

よる似合ふ

柀

二月より咲物かんと三月三日に
うららけ四月に六ちうららけ

本乃系

らりい冬くらり冬ハ枯冬を
三月よりけりいくらり系本
乃系存冬

桂

花とじよひつういさき只枯

乃系

本乃系(草ハまき)

落ふ

草本四月より五月までよ者

竹葉

着葉かたしに花のまじりて

標

五月乃むしま乃花の透るを
律とらんとすう

草乃類

蓬

野鳥(道)かしのうららけ物蓬
くゆらけいし雨のまじり家のまじり
いりあま長きく前りて乃天とれ律蓬

うは白本乃事(遠東より引いた)

未摘花

毎年のうち中乃夜(約露)
よつじ抽し

牡丹

花世よりりそそ(遠東)
と咲花(んえ)那(あ)と
百合同(あ)

葛蒲

差乃(あ)も(あ)て(あ)に(あ)白
ひと(あ)じ(あ)又(あ)ひ(あ)昔
る(あ)く(あ)神(あ)

芍薬

わ(あ)る(あ)花(あ)一(あ)時(あ)乃(あ)る(あ)咲(あ)日(あ)乾
い(あ)ま(あ)り(あ)く(あ)ち(あ)じ(あ)抽(あ)さ(あ)り
か(あ)く(あ)一(あ)時(あ)し(あ)も(あ)花(あ)乃(あ)り(あ)咲(あ)つ(あ)き(あ)る(あ)也(あ)し
く(あ)も(あ)神(あ)と(あ)ん(あ)と(あ)す(あ)る(あ)に(あ)蘇(あ)竹(あ)ふ(あ)つ(あ)く(あ)也(あ)

夕紅

白(あ)乃(あ)入(あ)る(あ)て(あ)く(あ)咲(あ)出(あ)る(あ)一(あ)く(あ)も(あ)不
ひ(あ)こ(あ)小(あ)家(あ)残(あ)る(あ)や(あ)咲(あ)抽(あ)さ(あ)ひ(あ)し(あ)

神(あ)なり

菖

す(あ)ゑ(あ)乃(あ)香(あ)く(あ)ち(あ)は(あ)友(あ)乃(あ)野(あ)に(あ)松(あ)岩
色(あ)よ(あ)つ(あ)く(あ)も(あ)菖(あ)な(あ)く(あ)も(あ)し(あ)る(あ)神(あ)

浪は似てうらと云なりうらに春日山左の巻

葛ころろ

野色あまきころろ置名森蘇
長かたしに似たりと家源史
うらわらふまふけ

葛葛ころろ

白前
うらわらふまふけ

菊

八月より咲物なりまを九月九日
うらわらふまふけの菊は黄たるとは
とよまのし白さるお蓮しとる菊も黄しあま

なま草ととも云なり

萩の

何とも考たすうし萩とこころ
しては風神よる白姫の幼体
あまの上風と志てうら

萩の

上風とてうら八月花盛にかわ
らの萩とは来り萩の花らうて
かわらまき梓し

花野

ちて此志咲物し八月盛に花野を
びらうむりしとあつ小萩花名の

上
カ三

わらまのふたし乾野しらつらよりのこと

若らう由蘇乃仕立日向風

女郎志

と六たう

尾花

種よむらう薄したるむま

とくひらうと種よむらうむま

薄

種よぬらうと種よむらうと

とむらうと種よむらうと

作あう入物と種よむらうと尾花よぬらうと
くらの薄よむらうと種よむらうと

若菜

若菜よむらうと種よむらうと

根芥

若菜よむらうと種よむらうと

若菜よむらうと種よむらうと

たうら日のあつたうたうらなとふけら事ひらう
と若菜よむらうと種よむらうと

若菜

若菜よむらうと種よむらうと

若菜よむらうと種よむらうと

若菜よむらうと種よむらうと

生面よりなる名あり

七種

宵七日は七種つゝ能ひしせりを
つゞ回ひつゝ能ひたすかすし
ろこささやうの上七種に又林乃七種し七種
ちふふ禁中しそて宵月七首のしと右七種を
つゝ所よりなるこひひとなり

玉本と高鳥

ころかへる

松子

石竹とこけりつむるし松

梅麻

まゝあゝろのし梅乃何か麻を
まゝゆゝは梅麻と名付く

日影草

日影りつゝいゝこけりし草は
あそびせらるゝの樹草人の道
をこきり母か

竹乃花

竹乃林

大竹といふふひりたしあは
竹と馬あはるゝし竹とては
よゝん

長行

西のちうくまのちのちのちのち
てうのちのちのちのちのち

かま行

ちのちのちのちのちのち
神のちのちのちのちのち

すま行

ちのちのちのちのちのち
ちのちのちのちのちのち

行のちのちのちのちのちのち

山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

さ

1 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

遠

十 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

ちのちのちのちのちのちのち
ちのちのちのちのちのちのち
ちのちのちのちのちのちのち
ちのちのちのちのちのちのち
ちのちのちのちのちのちのち
ちのちのちのちのちのちのち
ちのちのちのちのちのちのち
ちのちのちのちのちのちのち
ちのちのちのちのちのちのち
ちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのち

子七
カニ
カニ

長

くちまひくまのたましき神
し畑をくちまの神(畑)と云ふに

蘇

くちまの神(畑)のたましき神

若

くちまの神

豆

くちまの神

あまの神

返

あまの神(畑)のたましき神
あまの神(畑)のたましき神

神(畑)のたましき神

入

あまの神(畑)のたましき神

伊

あまの神(畑)のたましき神

河

あまの神(畑)のたましき神

和

あまの神(畑)のたましき神

舟一但白御さるる一

舟神の歌

本枯

枯のあかり夜物をとを月より
まろり木の葉とらじ枯いおと

うと世ぬぬきとよりぬとせし

山鹿

こゝろあり一木あるまかりしは
ほりりとあり一木もたんととらて

おさひ一木神し又川鹿のほと立神
行るのま水のも手神一ま鹿の村も

まもりてかひまうたけの神

野分

八月中はまはく女く鹿の葉とらじ
あまのたわじあまのまきとらま

あし一鹿のころ鹿ハ物さひ一かき神
まて野分のぬえある一

東風

ま吹くまてはひくくはまあま
くえ花さしとちじしる神は

まもりてはひくくはまあまのま
周をうら神

嵐

つらと吹物たふさきたる多ふ石は谷
作ま枯とやすすりわじしのをせ
たすしりし

あひ乃風

うぬあひ乃あつてるよ
ひらくをせも風まらぬ
風はあまのうし

ほ乃乃風

あまのさしふしりし御まらぬ
立時ぬ村ぬをのふたつらたふ

白雲

かひく群ふしりあつてあつたは
ひらひのなかり

浮や雲

あまのさしふしりし御まらぬ
あまのさしふしりし御まらぬ
あまのさしふしりし御まらぬ
あまのさしふしりし御まらぬ
あまのさしふしりし御まらぬ
あまのさしふしりし御まらぬ
あまのさしふしりし御まらぬ
あまのさしふしりし御まらぬ
あまのさしふしりし御まらぬ
あまのさしふしりし御まらぬ

雲

あまのさしふしりし御まらぬ
あまのさしふしりし御まらぬ

147
三十一

たぐもあめ月りかへさよのひらひら
とほまのくみあり物むしひくもすも

骨

又骨いらすすりかへる骨の骨りかへ
き骨いらすすりかへる骨の骨りかへ
めて骨の海りかへる骨の骨りかへ
てよりの骨りかへる骨の骨りかへ
うらむ骨りかへる骨の骨りかへ
を骨りかへる骨の骨りかへ
骨りかへる骨の骨りかへ

雲

つゆげいらすすりかへる雲の雲りかへ
もくろく雲の雲りかへる雲の雲りかへ
まきまきくろく

煙

黒煙いらすすりかへる煙の煙りかへ
の煙本もかへる煙の煙りかへ
たぐもあめ月りかへる煙の煙りかへ
うらむ煙りかへる煙の煙りかへ

雲の煙り

雲の煙りかへる雲の煙りかへ
雲の煙りかへる雲の煙りかへ

二
十一

才しくいすくふ豆のわり種こみ鴨きうう焼
火のうけかきききとて焼ゆうく立種をきき
の焼の物のこれですすこき種うー又月あ
てううさひきききあひの月をけきいあ芳
かんくうくうくうさひききききききき
中もとくうくう種うー

種物の類

初書

本指吹出て世とらうーすかぬいあ
ききようり黒種かーは本名家あ

さふうとくとなすうくくの面白ひの種うー
冬中の書きいさううううううううう
い書うううううううううううううう
つめらううううううううううううう
是書か種うー本名家たしあつううう
てうーうのなをたしあつううううう
あひ日然たまうううあひ時かううう
めめ種あもあひたまううううううう
いそいううううううううううううう

のうらすり言し又ほをいふらうらの言を
りまうらのや卯花のまらまよ言ふた
へりり落若乃極梅搦乃ちらま言は
とへりり言の付おも一白乃仕事も分
か形あし袖言まらあうらうてとを

霧

秋の中よりうらう物し秋の初へん
く物なかりはう言りうりの物
とまてとをし袖言あう高白すうこ
うらうら朝言霧乃うれをうにすうこ

の言ふとらう物し何れも言は卯花
もい合い又天竺言物束のうらまの
うらうらうらう物言まらて街の時
うら言かま言時をたうら言よ待付合
言乃ま言らにの付らゆ言ら子のな
神よ言付らまらうらうらうら言
ゆらゆらうらう言まゆらとを

阿ぬ

秋の中よりうら物かれた秋の初へ
うら言まら物し只何ぬうらうら

冬十月十一月まであり一町ありあり
まじり物さひくくありありありあり
常の遊ゆ種あり一社の所あり一軒あり
おまゝしてすまゝに手種ありけり事とや
しありありありありありあり

霧

白き霧ありあり物たれたれ
むし洞の種に式目ありてゆり所あり
日向林三月よりすなりなり
まゝ面 いろもはゆるふありありありあり

村

しらきありありありありありあり
ありありありありありありありあり
何と月みり種ありありありありあり
村ありありありありありありありあり
又村ありありありありありありありあり
村ありありありありありありありあり
も曲の名ありありありありありありあり
ちりふ琴付りも落梅の曲と云ふありあり

七

三

夕立

夕立の雨は夕立の雨に
夕立の雨は夕立の雨に

育由

育由の育由の育由に
育由の育由の育由に

育由の育由の育由に
育由の育由の育由に

ぬ

ぬのぬのぬのぬのぬに
ぬのぬのぬのぬのぬに

ぬのぬのぬのぬのぬに
ぬのぬのぬのぬのぬに

父母の父母の父母に
父母の父母の父母に

歎の歌

後

後々の後々の後々に
後々の後々の後々に

後々の後々の後々に
後々の後々の後々に

ま

まのまのまのまのまに
まのまのまのまのまに

まのまのまのまのまに
まのまのまのまのまに

る
都よりんて市海に後よりつるまは
自然成すもあはれしとていふは

駒
いふやもあししくいふ新う水草
かしてそつらうこころ神う又成

くうの神国にう鳥日交し駒そにけり
鳥の歌

鶯
初春より春の暮までうあまは

神よりいふたうあまひとらうりお
あまのこ聖なる梅行 吾もとくは神は
君のうらみも鳴也

百子鳥
うらみとあまはとてくあまは
くあつまる神う一言しめりひ
てうつくさうり花はあつまる鳥は初春不
は春の(たまきは)

郭公
春の中よりをけりとうらうり
かして春のけりうらうらふ

ありあたらしくしてあそぶふらふら
まきあけけりある書井此時鳥とよふ
ありあたらしくしてあそぶふらふら

田長

田長乃らよあそぶふらふら
る時ふらふらよあそぶふらふら
と向志でのたふらふらふら

鶴

鶴とよあそぶふらふら
松をよあそぶふらふら
よあそぶふらふら

鶴

あそぶふらふら
何と鶴の松をよあそぶふらふら

鳥

あそぶふらふら
あそぶふらふら
あそぶふらふら
あそぶふらふら
あそぶふらふら

鷹

あそぶふらふら
あそぶふらふら
あそぶふらふら

ひ神りーを赤と信承とすう物と文と付
あは海鳥不付し海を鳥りー琴と付は
うら唐りー海り鳥子付し文ハ候まき
曲付りーうらまを人聖物とすい合もあ
んまうー海り海り山形とすいしりー

鸚鵡

すゑの秋のらうー鳴ハ田舎は合
作鸚鵡ハ守りし細在り合もあ
重心らうま神とらうー

子鳥

まじく海のあはれとあはれと神は

春も鳴りのく月のさへあふたりと物行
するたわりのうと物あらしま前は信承
美林もる神とらう付り子鳥と交る候

子鳥鴨

まじくあはれとあはれと子鳥は海
はやすむたり

志

春あはれとあはれとあはれと神原
聖に合も重心らうとすい神原
数行とらうを京列田の徳苗代
居あはれとあはれとあはれと神原

雀

村葎をくしくまふを付てう

水鶏

敷多きこころわら袴(野)の
あひを月より六月とうしく
しつひをうりてあまたの縁を戸と
きとつらふや戸とじとひ付の(水)を
とらあまうりふりする白袴よりうり

海

海川のほとり別海行(青)原(赤)赤
根(赤)とほやする物(赤)もよわ
らひたあま色の(赤)くは(別)ゆ(赤)本(赤)の森

あまの(赤)た(赤)り(赤)ま(赤)郡

鳥

ひらひらうらよとむも(赤)く(赤)袴(赤)
赤(赤)の(赤)里(赤)ら(赤)う(赤)ち(赤)て(赤)る(赤)が(赤)り(赤)屋(赤)赤
ね(赤)敷(赤)か(赤)し(赤)ふ(赤)ひ(赤)合(赤)の(赤)把(赤)と(赤)つ(赤)子(赤)袴(赤)さ(赤)ひ(赤)
子(赤)袴(赤)と(赤)ん(赤)と(赤)す(赤)る(赤)は(赤)の(赤)野(赤)書(赤)里(赤)と(赤)く(赤)居
あ(赤)新(赤)之(赤)ひ(赤)合(赤)の(赤)こ

山

山(赤)の(赤)ま(赤)つ(赤)く(赤)山(赤)本(赤)の(赤)ま(赤)つ(赤)ら(赤)ひ(赤)と
あ(赤)の(赤)尾(赤)と(赤)ぬ(赤)と(赤)つ(赤)ら(赤)れ(赤)と(赤)く(赤)さ(赤)は(赤)も
め(赤)と(赤)り(赤)尾(赤)と(赤)ぬ(赤)と(赤)く(赤)居(赤)て(赤)お(赤)ら(赤)り(赤)と(赤)わ(赤)る

あひのりく

出乃乳

日暮

秋枯く森山海源を在るはみん
いふもゆさひしき神は秋の源

しき神をよまうと置くとて國神なり

輝

日暮一ひち秋とも秋つとて神
うわつと日暮を分鳴りのあ

あつとたしとてはみん

秋宮

秋枯りり神は秋しりのあ

よまやうみとりをんくさるまうとて神
うさうらくはひのゆたうとすあ秋
乃らわりあつたれはるは秋宮は
ちうく又神はすし神は秋とあひ
てあつたああ乃うつ時くはりて
まうししと神とてはみん

号

及三月は月秋とも秋の神は
夕時からりりああ

月也... 神と...
 する... 神の本の...
 あり... 神...
穀 穀... 神...
 ... 神...
 ... 神...
 ... 神...
 ... 神...

蛙

初ま... 田畑...
 ... 田畑...
 ... 田畑...
 ... 田畑...
 ... 田畑...
 ... 田畑...

胡蝶

... 胡蝶...
 ... 胡蝶...

唐乃古よりしる事し清華にてふ
の急法なり

月乃歌

春

おぼろごとんとすのてつる事あり
暑うたなりてさうくとわ

秋

秋の月乃風まらる物なりてはぬ
涼きとんとすれぬ清の秋なり

夏

あつとてひらりわさうとす
しき涼うらても月乃とび新

秋

しき涼うらても月乃とび新

冬

さびまふとんとすの氷の
はらばらとらふわりとひらり

月

まがくして鏡乃とてかろとま
月乃と云ふふとてかあは
あまをまはる月乃とんを
かふて何とて速信がとの思あはじ
先わらへ

若石乃中

若

若石乃中 餘月破をたふ少く餘の

上

四百

うめさうり

石

うめさうり山名はまろしあがり
てしりらとふもやすし神を

石しりら

友善乃事

友

うめさうり山名はまろしあがり
しりらとふもやすし神を

塵

うめさうり山名はまろしあがり
しりらとふもやすし神を

まろしあがり山名はまろしあがり

草刈 山名はまろしあがり

草刈

まろしあがり山名はまろしあがり

山名

まろしあがり山名はまろしあがり

山名

まろしあがり山名はまろしあがり

まろしあがり山名はまろしあがり
まろしあがり山名はまろしあがり

二

四十五

賤
あしきこといひゆるがしきもの
悪名しあつらふあつらのあなあり田
畠海山よふかへしとて世とちりるもの

志新の事

志
よ下たおほい合之を乃岐と云ん
まははるたを乃岐のあんご
ひよひくこといひゆるがしきもの
人しおしといひゆるがしきもの
二十より四十まで秘免のこわつ風情を

一
とと更ふつらぬあつらへし七八九十年とて
中く秘免もかへしとすへし道むつらぬ
人し秘免計とんゆてはちる事うんを
うながし

新
ふらつ志の土を乃岐とらけ計
とんえへしとてあつらへしとて

袖紋の事
迷情はあつらへし

袖

上下おは合ひ又山あひの袖は社人
乃きろ物長末く山よあちひの系
とりつゝを行なとて波あかく本侍あり
取乃あひと場あふきたりて袂祇

袂

上斗おは合人自然うすう人愛深
袂がとく有あうし果人山うつあま
かしのよおは合人

袂さあの手

袂

上下たうは合人

きぬ

上斗り

恋乃終

團見侍恋各上別恨同恋初末
恋あふまはる除く

- 一 恋恋 二句あつて三句あつて別恋と一恋の
恋をまじへて情思をりうくくじに恋は
一 袂先ニ恋不付い恋の袂先も不付い
一 さいしさいに恋不付い恋よこひさいしに
一 名あ乃折の裏 恋乃うまて目控あは

一云 黙然 一門

述懐の事

世と けりて行ひてありてはさきくらし
めらうふしうと習てせりあはほ
るつらえさめらなりきオタアタを認先
とあきまはれりやと切りつとあて相乃わ
それなりた女嘆かありたりつと元換雲
は雲乃のゆもえはゆるんえまへは述懐
の類とあてふむむむむむむ下あは但むむ

急一ヨシヨシ人と思ふまが国はまじりま
たしとら子細た

世と捨人 くのん原原乃道とまめれん
あては道とまじりまじりやとまじりかたあて
何ふ付てと相あふんがう一徳家とて山又人
備海くうあは信じり世はくらしはるまを
とありと信くまやとあふんさうれとて
あなり

老ハ

わこながら物なれた定めなりきよ
まろて中くつまがく流るる事風情
と付傳るる一たりとちよもまろり

さすしるハ

人毎まらう人まらぬ物なれた
人まらぬ家まらぬ物なれ
させ流あつとせ一のんこ流まらうとらんか
く乃位居と引くこと田舎に無ひ居流ひて
民海士人よなまてりやう都を東あまはる
まよゆと流ひ相まひ一まらぬハ思ふと

あつべ流あ神とちまるとすりさすしる推
りかういさふ作あつ物と我方のをらほ
てハ物中こと

命れハ

まらうとるまらぬ物なれ
まらうとるまらぬ物なれ
中く定めらるるまらぬ物なれ

述懐乃詞

若世古命一親子 暮衣
思衣流家 捨力 暮世
まらうとるまらぬ物なれ
まらうとるまらぬ物なれ

本りとはは契入ももろき乃句よそと
生懐の句よおまよ

禁中御事

けりく梅えまににん
ゆり百あ乃句よそと

くまりたまふ人よまろきころ種物あまた
といふ家ころ乃西也あなりたるもや
うふしあそももすしほまてやまをれ
んくころそとくかああま一ころあそま
なくしてあひころ種あつるあし

種紙句

けりく梅えまににん
ゆり百あ乃句よそと

まかろちまもももろきころ種物あまた
らりてまろ種一けりあ種よそと明
若乃ぬろく種物あつるあそま
ゆりくそとくかああま一ころあそま
も井道よまもあ種よそとあそま
くしすろ名あ種あそまあそま
あそまあそまあそまあそま

とていふ事とあるとていふ事とあるとていふ事とある
久日昔ながらん第控せんと海を渡るわたり
とていふ事とあるとていふ事とあるとていふ事とある
とていふ事とあるとていふ事とあるとていふ事とある
あり中子とていふ事とあるとていふ事とあるとていふ事とある
神人とていふ事とあるとていふ事とあるとていふ事とある
とていふ事とあるとていふ事とあるとていふ事とある
とていふ事とあるとていふ事とあるとていふ事とある
とていふ事とあるとていふ事とあるとていふ事とある

とていふ事とあるとていふ事とあるとていふ事とある
浦つとていふ事とあるとていふ事とあるとていふ事とある
とていふ事とあるとていふ事とあるとていふ事とある

夕暮此句

とていふ事とあるとていふ事とあるとていふ事とある
他神とていふ事とあるとていふ事とあるとていふ事とある
友とていふ事とあるとていふ事とあるとていふ事とある
眼射ハ 妻ハ 四手此ならぬふんよとていふ事とある

とありては子孫海川のふらと付程もじ
夕暁乃狝芥らひり幸子合みかたきく
とありてはなうふするに又結に物さひしき新
とらんとすりて及老後なり

名寄

まへ白紙紙すけき公物とて今換
るれ物にわまなきとる人まじり
より所用し又名寄乃ち白ふまふまうとあり
とありてはなうのぬ白かり大付うに中一の
なりひの意氣とりて付たうてあひまて

力のみとありてはさほく付やうあり
名寄は花付くゆ白とて云

さゆへんはさほく付やうあり
うらなをとりてくれんてれ心
まじりてはなうとて一野と付たり

初ま乃りつてあうまじりてはな
あうら回乃れくうらうはな
初極くまじりてはな

梅極よ花付り新事

梅りも乃のほくちりうは白うん
 くらり本よりさけけつ花のあはれさ
 妙きつら花下りあはれしとちり
 梅さきら梅下りもあはれ朝月東
 きふたうと梅さきとまうとまう
 舞人のうらうら花のうらふ
 毎こくらあふさふ乃の山風
 こね梅さけひ乃あふたうねえ
 弟も弟とけつ梅乃の中

三十一
 三十二

うへー乃乃志きつらしじく
 わきゆくこあつ原さうら古家
 是回意もてこまう

夏乃白くさめりう弟れをみて
 みとのあひひ乃あつらうら
 一ひつすこさくらりなつこ
 梅聖子もたうとのこらう世れ
 是あのをそわまうとてはすく
 古の浅茅乃をたうとのあつては回

三十一

上

五世

鳥の鳴く声

鳥の鳴く声とてさうに
鳥の鳴く声とてさうに

鳥の鳴く声

鳥の鳴く声

鳥の鳴く声のこゝろを
鳥の鳴く声のこゝろを

鳥の鳴く声

鳥の鳴く声とてさうに

鳥の鳴く声

鳥の鳴く声とてさうに
鳥の鳴く声とてさうに

切男秘傳良藥抄

連飲此藥丁媽病入事

目錄二十一及十二條

一 親白之事

一 六矣

一 口道

一 正親白

一 祈禱後白服

一 非紙上白

一 速白之事

一 凡碎

一 賤之事

一 服對言

一 追善上白

一 呪咀上白

五十四

五十五

とたうとさうくとあまき連吉のひいさまの親
白と云いといひまうの義は是と能治の才
丁秘しねそらく夫ノ下はまうの結巴の
後ありきし結巴もさうくはねたりし如物
乃事初ゆきまうの志ありさうりて連吉
のさけりたさんとうろくその義は
さうといひさうりて地見ゆきまうの
一正乃親白と云いし能著もつらうされとも射
の切らうと云いさうて

結巴

うの山家乃極北ありりーより
能をわさうらうものとうと云れ
是はうし賢乎と云るて家とつを極
とらひあくと云ふとありしはいふと云ふ
白と云いし是は家方極の中のまうて事
乃能治の白結才といひさうと結くは
わらうと云ふも又まき声となうし是は
書らうと云ふはまきと云ふは結才と
結才三軍陣ふくまう結才と云ふは

結巴

三物一伐より二交計三用とて一時
あり世は沙音のうきとて世なくと世中
ありりわちありまゝの家を能く集
空恵び口伐の秘事あるこれ三系
玄法は下より長以丸は沙お徳とう
ととて又年暮りの中二三人のゆりたまふ
平もお念とて了は徳心のゆりたまふ
中二徳白の事
右よりの事秘事も徳心と連声もわらさ

世とらるるの世の中はさうして
らまきりしは世の中連池ようめく
ゆりたまふ又中三乃のゆり三
秘事とてたまふ
小男麻のゆりたまふのたらしと
さうとての声とてとつとて手
ゆりたまふの中はゆりたまふ
ゆり

宗碩中三

夕月影さすやうりわの松をさく
是も夕月影をさくやうりわの松をさく
長閑なる月や影をさくやうりわの松をさく
白雲と花乃名跡乃白くれく 楓三
是あのをゆりて結く血を染めわたり
午句と赤三乃うらうらひをさく又名をさく
るやまき平句をさくよまき平句をさく
右赤三ノは松浦句とわたり又去人の松
指は松山をさくと名をさく又名をさく

帰るるうらうらひな乃声まらうらう
是あう平句をさくよまき平句をさく
のよまき平句をさくよまき平句をさく
是乃は逆ま白乃のよまき平句をさく
右とくうらうらひな乃のよまき平句をさく
赤三ノ
うらうらひな乃のよまき平句をさく
是あう平句をさくよまき平句をさく
わさまき平句をさくよまき平句をさく

二もいりりひろき教

おもひよきものあり事をまよふら

まよふとておもひのりひーものよ

こゝろあはれしきまよ

まよひのつきたくはるきまよ

あつちまよるりうたのよ

白紙のむねとら

つらつらつらつらつらつらつら

人のこゝろのつらつらつら

またりつらつら

うらひもの花よめふてあはれ

おもひとつまよりてうら

おのれとつらつら

風吹くまよは揺るるあはれ

おもひあはれしきまよ

七古律のよ

うらみあつちのまよるり

ちまよるりまよるり

八云集にみよとらふらふらふら

兼とむしにけららふらひらふら

うらふらうらふらふらふらふら

九んふらふらふらふら

我をふらふらふらふらふらふら

まふらふらふらふらふらふら

十ゆふらふらふらふら

ふらふらふらふらふらふらふら

ふらふらふらふらふらふらふら

凡務むらふらふらふらふらふら
はむらふらふらふらふらふらふら

才又田道し事

たふらふらふらふらふらふらふら

ふらふらふらふらふらふらふら

ふらふらふらふらふらふらふら

のふらふらふらふらふらふら

ふらふらふらふらふらふらふら

又大まふらふらふらふらふらふら

ふらふらふらふらふらふらふら

うむらうの歌あり

ふはれたる一車たるとひうらうに
かた乃と下と折らううらうに
かた乃と下と折らううらうに

梅乃とふそれとふそれとふそれと

あまきつらうゆき乃たううらうに

是ととらう

梅乃とふそれとふそれとふそれと

あまきつらうゆき乃たううらうに

ふはじうらうのうらうに

月やわらわきやじうらうに

まやわらわきやじうらうに

かきあうらうのうらうに

かた乃と下と折らううらうに

かた乃と下と折らううらうに

かた乃と下と折らううらうに

かた乃と下と折らううらうに

かた乃と下と折らううらうに

洗

山頭杖載孤輪月
洞口豹吐一片雲

是と云ふは同一

山就入門推不出

月光布地拂亦出

此就乃字心うけ小陰けりとは半
かろとい就乃字は他の書より一なり
對ししく合点てまた急就より行ゆ

徒云林承多其極くわりのつかぬ
及いゆとあまきん付ゆと一教ゆ
根ハ子中才三六書人といゆゆ

無きかきく書やゆり母れ枯り花

宗碩者ゆけてふとハ我と云テ又
一書やう乃智いぬるゆ二すな
よとハ又書ノ所をといふてくも
是ハウクス又ハ心ハ乃又字
論やといひてハ一智いぬる

山藤その時の扱ふ

撫出りる為うきかたりしけん

是の家長より付らりやうな付らり
わめりまきい扱ふこといふ事とて一代
一白(但是し奉成目海客のさま今
各人としてすりあはれにさうしあは
後と幸ハ一字(但扱ふし必得約
乃ら然り是をよてふ海のと約の言
是宗頑句い扱と定長

松よこ海自りる月くわりて

とありてあり乃扱ち代未定
上より一徳と云本或自乃は判目は書
是より外いありさうとて又能得小
賣らうとていそ様もその子に郭云
植木乃相湯をとりらるるを
と悪ゆとて師長息ことうく時其のた
ういかりまうふ初枯たとの後りより
よしじすく。初あが。初嵐。海定まら

と付くは下向の赤い帯林事うりり末
の初し各句紙片とありて体め字うりり
は字蓋ししてはよありてその形は体め字
わきこ平句たりしは髪眼毛のしと又
りり(乃句よ)

西と深うらんりまてけと又ソンの形
字本不的童るて考

あいうへとひろく布とまら林

是ホとく(乃句)

中丸新徳と事

先題とくくあそんゆの才子のあそ具の
乃人あふく(乃句)のあそ具のあそ具も
あそ具のあそ具(乃句)のあそ具のあそ具も
あそ具のあそ具(乃句)のあそ具のあそ具も
あそ具のあそ具(乃句)のあそ具のあそ具も

才十進者

重利送り字行塔再文字あそ具(乃句)の
あそ具(乃句)のあそ具(乃句)のあそ具(乃句)の

平人曰おのる人ほひあそ
くまろこ

三

九

舟十一紙

舟一由乃友もあし神句にて仕置り
親句乃決りまきまわつてまき細路のよ
これらうそりかほほしうまわふ人のあも
まよとまよとまよとまよとまよとまよと
まよとまよとまよとまよとまよとまよと

舟十二呪詛し事

友も切字ふまふふりり首切朋切と云
まよの舟一たふくみ文もまよまよ
あはれ花やとらう乃らのまよまよもつらん
連声もたふすと首切花やあはれ月や
あはれ花やまよ月やまよまよまよまよ
アカサタ十八ヤラこ又みまよとまよと
のまよあひもあはれまよと首切とまよと
朋切とら申乃まよまよ乃まよまよとまよと
一終りあつて切まよまよまよまよまよ

と胸切しきしは秘つどの秘ゆし

才十三形務軍陣し元祖のゆ

武家方志ろしめさるしは

ちり太平記は平叙破城してせそ

暖けけてうらろくせよ

一むハウ作りらまるるしは務め

師家と有り暖けけてトろく

は是事と首押しきしは

茂やこふろ款をららん

二教法良なきけしは風やよ

らんト又又白のゆきき

機中しちそ一過しる名人

一とそ連しころ白

黒けけころる色をせよ

風ハ夜うかろま

わはあむまし之教乃字し

為お海とろやぬるな軍し

りつろりと信色家乃集し

前代まの

ふと云ふもさへ後さうも又長は丸(相約と
ぬさうり又源頼朝云々なるは常鑑名新

頼朝もさう乃軍より名取川

是亦よそてうくまうる一(お作赤雲乃
秀遠乃由中しうや頼朝よりよカキリケし
程軍は名とり乃た十二又子し老男乃を
まき教るじりく多し毎切字かうて教る
よそにけしと云人おありけしと云印字
なるれ習ひ乃由がし又重名は下らう

うきさうらひやうそそのまうこころ
ゆつたりひらひとやうそくや遠声アカサ
ナハヤラワくものましまこめきしきき
とがうこころ旅軍下向乃出ときこひこあ
のいこひ乃ゆ作さあけてうさうさう名
近の名云と今時の人考ひり(お忠)教る
性(か)ゆらゆら神通まねらう(まき)き
昌(ま)ままおぬま
夜(よ)やねりひまけしとらうあし

是ハ乃我見中乃らの句反之や下切
より旅籠もも方と同一の智日回身白
時今今わめろ下とふみ月うら
是ハ酒依乃ら介もと九多(多)す
う程介く四男よじく今今のみま下めら
ノわアカサタ十八マラく是と君面(二)れ
鹿よてさりけふ旅秀吉云中(一)らり
互うり鹿と切なき(一)
南代権現権用東河出陣の時

あきらのとと系は本社の下本(一)系
あけらとと下と下又(一)なり一是(一)歌
と切又下本も(一)なり(一)下本と切ら(一)
ららちと(一)なり(一)ま(一)作(一)是(一)く(一)は(一)は
し(一)わ(一)る(一)一(一)か(一)の(一)ゆ(一)本(一)れ(一)の(一)系
又(一)他(一)と(一)越(一)重(一)勾(一)張(一)我(一)又(一)越(一)ら(一)ま(一)を(一)
舞(一)舎(一)乃(一)厨(一)らん(一)ま(一)の(一)ゆ(一)と(一)地(一)り(一)魚(一)の(一)後(一)又
西伯回美里重耳走(一)翟(一)ら(一)に
皆(一)心(一)為(一)主(一)覇(一)莫(一)死(一)詩(一)歌

セイハク エウリ
 王霸タリ 死ラ敵ニ
 何れも声
 何れも声

是こそ心とてけなき事なり
 りす人一人例千万なり是の
 て書きたるはゆかにわされはぢこの
 夕一原友家へし申わはに怒る
 声ハ声うらむことあり
 中十四巻末切字あり
 中十四巻末切字あり

口信の事

下知る中そよ 大形ゆゑに
 衆字あり親身毎交はるゆにわ
 然乃る氣ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 相おもとあゆゆゆゆゆゆゆゆ
 三作付ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 中十四新室院板あり

あまのあまのあまのあまのあまの
 之ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

あふと然りりよ去也下一梅華のまよ
毛のまよ白しふ勸字ニまたまよとく
るは是中一乃智心の秘り中ちんあふ
ま一清中懐帯も同んよ合きて宿雅
号雅乃んよあふつめあふつ下一紙よ
給とぬくもあふま

才去去花は梅梅梅草梅也一花の
付梅事

花は梅付らたの中大花は梅のあふ下

付梅之まの花さくつなれは月を梅
ふたのあふとあふつまも人のあふ

あふ

しんく一花乃あふ人のいとなま
うの報とつて梅まつそそ 良徳
あふ付竹さそあふつとそ

美若中しとくくはむあふえ
たふ中りさやうるまはあふ
あふあふとあふあふまこゆあふ

しんらん草くちや平乃花
こすゑ乃花のりまを花中 日
おち草とありゆへ本の字入るる西大
る乃習ひ

振さく時分はんやうきこよう記
おとくつく本のまゝとらん日
骨本と付らゆへ刻くの花と
毎道花りやさうはなす乃本
推こよさく花の保縮袖そり日

ちる
造かりの花乃教そのとめこそ
かんか草あひくます八重花
右付白路くよまをそて花あはれ
して付肌分あわへ一化唯ぞ花角く
お白一本と名あよまこる花中一書
ひあうくかん大さの花乃白くさる本何
中おく物多乃花をく白作り燈

才十六漢和
和漢乃何和乃くふる花字をて用又約字

七十六
 起と字て和乃方よりまじ字をこはま
 ひとらひくるかきと横和乃時反起平
 起と字て和乃方よりまじ字をこはま
 一まじり格合おん十一節と用ひらるは
 中十七二四石向二六對下二石連
 是ハ清乃反平乃字の直格方をよん
 二物て振るよ用ゆる事か式まき方凡時
 音と音とをわらひまらと後畧して和
 心とつとさうわらるを

中十八初乃病
 中十九同字之病
 中廿初思之病
 中廿一風傍
 中廿二片韻
 中廿三首尾
 中廿四返奇
 中廿五懐帝之清中
 右ハ今糸乃と子反竹因抄とて以後

有る一は一ちのり家た書たのり
若く用板と事返くめさるる
たさやとふんとうきうんたり山
道能帯もまよと思案ありて用ひ
まき思ねと夜と入るる松才三の代
柳の親句

喜辰令月歡無極

萬歳千秋集未半

は初つま歌柳是と声イキと年三

右ノ句ハ歌句ニノ句ハ松と以て
の字と松句冠ト也音連声ノ
也一松右乃得との句はか
まんでとんメモのみ書し

長生殿裏春枕富

不老門前日月遲

この三ノ句ハ才三と用ひ冠よ
声もくくく一のうらたく
有るま松うらたをんらト

イキニ平し富不意面是ぬ(ぬぬ同巻)
且し一そしそしそしそしそしそしそしそしそしそしそしそし
年え自三他は南しゆらる書符念入
ゆら此目繼古キ文のこそあくとそりて
引く

心産く帝初ゆらるる海始は良
嘉例めしてこまきまきまのうこ 貞女
曲とひく取ふ心産とけけり 貞女
右巻白の六平乃初あみまると連声なり

くくくゆらるる乃たし年始の祝と
嘉ナニ又子し民のたし嘉例のう同物
乃まきまらま乃たト物たまきまら
この曲と門のくト琴乃こ産とのと
トうけのうト味の四宿んあまら一か
の養つさくうとけし流あくくくく

能譜秘傳

一能譜の賦物くくくゆらるる世こまきまら一是

高のまひとして能信おもとらるるは
あり能信よとらるる義口信をなよと何
の二字律道より出るる事たるを賦
地より能信の標きこらるるといふも
信律より出るる左極よのたつぬり
まこと長弘一派よのたつぬり
わとちよは信能信法連歌とらるるこれ
よとらるる志きつらたると郭云月高
の義白つらとらるると何とて一字義
賦

乃らるる^レ能信よとらるるは能信と連歌と賦
のよとらるる能信のうらふまはあつと
つらとらるる

一義白能信よとらるるは能信の三才と何と
ふ義白の天のうらふまは能信の地と何と
才と何と人のうらふまは能信の才と何と
義白よとらるる付てまこといふ義白と連
一才と何と人の道乃らるる何と何と
ひ能信よとらるる何と何と何と何と平白

めうぬ^上ゆうよすり^半のめい^半の未^半を^半なる^半は
うめ^半う^半う^半く^半麻^半の^半よ^半す^半う^半の^半お^半め^半の^半白^半の^半七
白^半又^半八^半白^半め^半の^半白^半の^半め^半の^半う^半り^半の^半於^半未^半な^半と^半ん^半え
ぬ^半一^半え^半え^半え^半う^半の^半白^半の^半め^半と^半は^半ま^半ん^半の^半
家^半よ^半さ^半せ^半め^半く^半こ^半う^半ま^半ね^半り^半て^半八^半白^半は^半仕^半後
の^半お^半ま^半い^半

一^半番^半白^半乃^半乃^半らん^半と^半め^半乃^半乃^半
名^半を^半た^半ら^半う^半ま^半し^半月^半や^半う^半う^半と^半お^半う^半ん^半 家紙
め^半せ^半と^半じ^半こ^半一^半年^半ま^半あ^半ら^半わ^半じ^半ま^半ん

右^半と^半よ^半て^半ぶ^半り^半て^半中^半と^半そ^半や^半と^半た^半ま^半ん^半く
流^半と^半あ^半ゆ^半り^半

一^半番^半白^半き^半り^半と^半め^半の^半中^半乃^半七^半文^半字^半の^半下^半ま^半
ハ^半も^半に^半お^半し^半よ^半て^半た^半ま^半ん^半ま^半り^半と^半め^半ゆ^半り^半
宅^半よ^半と^半め^半共^半ハ^半以^半書^半よ^半ま^半く^半ぬ^半り^半 家紙
書^半は^半り^半ま^半け^半と^半や^半う^半の^半ま^半り^半

才^半と^半て^半と^半め^半つ^半の^半乃^半乃^半の^半し^半らん^半と^半な^半一
よ^半と^半め^半こ^半乃^半乃^半の^半ぬ^半ひ^半ハ^半は^半ゆ^半あり^半ま^半り^半ま^半り^半ぬ
疑^半り^半未^半来^半う^半下^半知^半才^半う^半ハ^半右^半と^半乃^半の^半と^半先

くろくす者も服居志つていふ
てとめりて右之乃とめさめし
是智ひし中少もいふハ上中下白の
まりりて二白の立居うは作り

入月乃やうやつり一と朝乃月
世久乃少麻乃治志くふあま
里人のま粧うらふの景遊しは 色
わつたのくひとめてくは居居
信も果報乃はくんくう縁

花やうふ種冊ひらふよまお入
右しりともいふ一格に但者白くは
ひあまじうにせられたとに報白のふ
りえんけしとくくくくは秘傳
一花は梅付らハあるの表梅やうあ
くろくめしと信ひのふしたるひ梅見
まじりともあある乃梅と付るの梅と
二本ありて白意はかゝるをうよすり
梅の根え一本をきこし是ハ秘傳也

上
八十二

花よりやうりてさひまきり方の心
いふまよもつらむ存のこころ本義

一 植物よあけり事とてふんあむの味をそ
もあつてもあつあつたうねむうみ紫
植そとさやうよすなり

一 梅よ花とけりて梅物よつらると同格
徳御とてんてき

一 車ものよにけりてあてのよとていふこと
もからぬにけりていふこといふこといふこと

してはらるるわい

一 祓紙よぬき 卒書 述懐 名取人
の名 ぬきものやうふらりて中三す
てすなりぬきものやうとていふこと

一 子ものよのきりぬきぬきの切字のあつ
うむらりぬきのぬきぬきのぬきぬき

一 あけりぬきぬきぬきぬきのぬきぬきの冠わ
けりぬきのぬきぬきのぬきぬきのぬきぬき

一 能譜の二文字の凡後等の二文字のゆり

志の心なく花のらるらん
いんこにえん字なりてと後るりて
落るる

天木抄上終

相傳一大事秘切事

二十又ヶ條付七ヶ條

凡大和ある言長あつてあるみかたど
のつらうのちをきこておとここと要
ふしすらすまゝある相傳より素心
あはわらむとらん大澤のまをさる
まへ

才一とある相傳の秘

字加くこゝろ

身口うゝ字を略しこゝろ事

らんとまりつめて掃くそふらふこゝろ
堀ゆ縁伐し掃中寺有深も源流お
傳のその二の字のこゝろありあり
くすぬふゆむじろんそとふた
うひのらの字のこゝろ事
神字よとれそとよ ぬそとく ぬそ
神よぬそかん ぬそらう ぬそとぬ

人よとむじ

のてとつこのあり

竹たて卯又松の極あり

孫しんちりまじり

仲あお

うゝ後日とぬらぬらるる
うゝとらくそんこゝろ

水のこゝろうゝぬ母のこゝろ

うゝとまりつとらぬまじり

美とそかん 月とそらん かくそ女

あひらう ちをちうらん ぬひやうと
うらうくまじりー ちをちの船ちよと
あうのちをちよちうらんをいざれ

ゆえとあうちをちぬぞあう
とあうちをちぬのちをち ちのち
うちをち ちをちうらん け頼
そとやとのちをちぬらん
じりーちをちぬらん

まじりうちをちぬらん
ちをちぬらん ちをちぬらん
ちをちぬらん ちをちぬらん
ちをちぬらん ちをちぬらん
ちをちぬらん ちをちぬらん
ちをちぬらん ちをちぬらん

まのちをちぬらん
ちをちぬらん

お是のうへにあらうのうへにあらうのうへに
秘のうへにあらうのうへに

志のうへにあらうのうへに
蓮のうへにあらうのうへに

そのうへに

東海の上のうへにあらうのうへに
ねのうへにあらうのうへに

よそとてててててててててててててて
よよよよよよよよよよよよよよよよよよ

るうのうへにあらうのうへに
よのうへにあらうのうへに

河後してむむむむむむむむむむむむ
くくくくくくくくくくくくくくくくくく

加のうへにあらうのうへに
よのうへにあらうのうへに

くくくくくくくくくくくくくくくくくく
遠のうへにあらうのうへに

物とくそれりくくくくくくくくくく

ありては
かえりては
しるしとてありては
後廣の定
しるしとてありては
かえりては
しるしとてありては
かえりては
しるしとてありては

ありては
しるしとてありては

ありては
しるしとてありては
かえりては
しるしとてありては
かえりては
しるしとてありては

血乃海ありてそのそりとまらりたり
とさうじりー船体の健さよとてあつ
くひより是あのを西にそくく津海も
かゝる卒してあゝあゝくひは待ふー
てりーのこは養なりと九口獲ゆるまを
皆くもたふなりー書あこあろく名ふ
くそまきまのこゝろりーくろくせし

才六やうのまのま

十二を條十日を條くまはたのいふ

(抄のり)

後よりしるべしーあふらけりし海あり名
と智人ともあはれん

一印や しんりーあふらけりー

又あしりふあふらけりー

二中や せいしんりーあふらけりー

あしりーあふらけりー

あふらけりー

三拾五や せいしんりーあふらけりー

あふらけりー

下

いふまゝのいふまゝに

ふはや

たふらふちふらふははは

ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふ

ふふふ

ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふ

ふふふ

ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふ

ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふ

おんやとをあるんてうごうひて
月やあふらふささのうらうらな
きやあやあや 月や い類は合の
やうらうらや 小初遊や いれよ
いれやいれ 花やうらん ちやぬ
あんとうらうのやい ちやうや人
とかなうらや 移るい捨るやい 神あう
せとや い類は合の捨るやい

花川のうらうらあうらうらうらや

あふらふらうらうらうらうら
あふらふらうらうらうらうら
ありや い類は合のうらうらやうら
あせやうらうら
ちやあうらうらうらうらうら
あふらふらうらうらうらうら
あふらふらうらうらうらうら
あふらふらうらうらうらうら
あふらふらうらうらうらうら

生つしむじりていそや

ふめやの種やまて

なひの川邊にたつあひあはれ後の

ういかにくあそてさしあや

ふめやの種やまて

中へやのつや

あやとやのたつあひあはれ後の

あやまきつたのくたのあつて

あつてあつてあつてあつて

あやまきつたのくたのあつて

あやまきつたのくたのあつて

あやまきつたのくたのあつて

あやまきつたのくたのあつて

あやまきつたのくたのあつて

あやまきつたのくたのあつて

あやまきつたのくたのあつて

あやまきつたのくたのあつて

あやまきつたのくたのあつて

と澄あつて

又やうにうつくしきツツ器にうつくしき
りつとまはくさきまをうつくしき

牡丹の田の植るうつくしき
ひらりのうつくしき
ひらりのうつくしき
ひらりのうつくしき
ひらりのうつくしき

右の首のうつくしき
うつくしき

舟のうつくしき

うつくしき

うつくしき
うつくしき
うつくしき

うつくしき

うつくしき

うつくしき

うつくしき

やどあいろやうのまあり 下 ころもあはれ
さすや夕日 下 じ彩し化 下 津 下

舟十載とてしつら事

夕月兼さすやいかりはは来れん

さひくもあつらひくじのき

はあろや中やしらすやいあろや

あろよひうまてあしひくはあろや

あつらひくはあろやいあろや

あつらひくはあろやいあろや

舟十一あつらてにさ

あつらてにさあつらてにさ

あつらてにさあつらてにさ

あつらてにさあつらてにさ

あつらてにさあつらてにさ

右あつらてにさあつらてにさ

舟十二あつらてにさ

あつらてにさあつらてにさ

あつらてにさあつらてにさ

うしく時人ゆる人

才十三六の事

うにうらやうたのりかたひゆり

けさのこゝとまるとゆゑにわが事

うらゝゝをさかたのけり

あまらうけいゝゆとくあつひらのこゝ

舞花の陰をさくあつひらのこゝ

あつ

あつひらのこゝたのこゝのこゝ

や月を屋くらのあつ

もいゝゆらうま(あつひらのこゝ)

あつひらのこゝたのこゝ

あつ

うらゝゝん若男のかつ

あつひらのこゝたのこゝ

あつひらのこゝたのこゝ

うけさゝうらゝゝ

あつひらのこゝたのこゝ

舟十四りの字を解してめらるる
 邦をせむの物きりたつてつらけ
 悉くくらんうわさのひまじん
 右う路やとめさす

舟十五志とらふ凡白の流りよ
 海一りの流りあり
 竹の流りありうらよと申さるる
 船のわだとらふれあまうと
 是れとらふとらふていへんていへん

色あり又教乃志はあつそくふと
 くととらふとらふとらふと
 舟十六とらふとらふと
 舟十七とらふとらふと
 舟十八とらふとらふと
 舟十九とらふとらふと
 舟二十とらふとらふと

舟二十一とらふとらふと
 舟二十二とらふとらふと
 舟二十三とらふとらふと
 舟二十四とらふとらふと
 舟二十五とらふとらふと

喜こそそそ花とや見えんまじり書
くれば梅まじりひさしのたき
よの身驚乃かきうらまへてうらひさ
ふ家のななくこそとわたりまじりあはれまを
よかきふなり

書ありてそこのこれあつたまを
一冊中もまじりぬ松色見えりなり
あはれまをまじりてまじりてまじりて
とめウリスツヌ乃運書まじりてま

己

舟十八にてとら石室よそまじり
まじり乃つまじりてまじりてまじり
あつたまをまじりてまじりてまじり
まじりてまじりてまじりてまじり
まじりてまじりてまじりてまじり
月まじりてまじりてまじりてまじり
まじりてまじりてまじりてまじり
まじりてまじりてまじりてまじり

まきなまをなまえん ^一あやまし
つゝ ^二それより ^三たまがらと
それよ ^四是えん ^五たよ ^六あやまを
いふも ^七はあ ^八い ^九い ^十い ^{十一}い ^{十二}い ^{十三}い ^{十四}い ^{十五}い
こゝろ ^{十六}を ^{十七}い ^{十八}つ ^{十九}い ^{二十}つ ^{二十一}つ ^{二十二}つ ^{二十三}つ ^{二十四}つ ^{二十五}つ
ま ^{二十六}り ^{二十七}い ^{二十八}つ ^{二十九}い ^{三十}つ ^{三十一}い ^{三十二}つ ^{三十三}い ^{三十四}つ ^{三十五}い ^{三十六}つ
田子乃海よりいふ ^{三十七}これ ^{三十八}い ^{三十九}い ^{四十}い ^{四十一}い ^{四十二}い ^{四十三}い ^{四十四}い ^{四十五}い
あ ^{四十六}の ^{四十七}い ^{四十八}い ^{四十九}い ^{五十}い ^{五十一}い ^{五十二}い ^{五十三}い ^{五十四}い ^{五十五}い
名 ^{五十六}平 ^{五十七}い ^{五十八}い ^{五十九}い ^{六十}い ^{六十一}い ^{六十二}い ^{六十三}い ^{六十四}い ^{六十五}い

さ ^一ま ^二い ^三い ^四い ^五い ^六い ^七い ^八い ^九い ^十い ^{十一}い ^{十二}い ^{十三}い ^{十四}い ^{十五}い ^{十六}い ^{十七}い ^{十八}い ^{十九}い ^{二十}い ^{二十一}い ^{二十二}い ^{二十三}い ^{二十四}い ^{二十五}い ^{二十六}い ^{二十七}い ^{二十八}い ^{二十九}い ^{三十}い ^{三十一}い ^{三十二}い ^{三十三}い ^{三十四}い ^{三十五}い ^{三十六}い ^{三十七}い ^{三十八}い ^{三十九}い ^{四十}い ^{四十一}い ^{四十二}い ^{四十三}い ^{四十四}い ^{四十五}い ^{四十六}い ^{四十七}い ^{四十八}い ^{四十九}い ^{五十}い ^{五十一}い ^{五十二}い ^{五十三}い ^{五十四}い ^{五十五}い ^{五十六}い ^{五十七}い ^{五十八}い ^{五十九}い ^{六十}い ^{六十一}い ^{六十二}い ^{六十三}い ^{六十四}い ^{六十五}い ^{六十六}い ^{六十七}い ^{六十八}い ^{六十九}い ^{七十}い ^{七十一}い ^{七十二}い ^{七十三}い ^{七十四}い ^{七十五}い ^{七十六}い ^{七十七}い ^{七十八}い ^{七十九}い ^{八十}い ^{八十一}い ^{八十二}い ^{八十三}い ^{八十四}い ^{八十五}い ^{八十六}い ^{八十七}い ^{八十八}い ^{八十九}い ^{九十}い ^{九十一}い ^{九十二}い ^{九十三}い ^{九十四}い ^{九十五}い ^{九十六}い ^{九十七}い ^{九十八}い ^{九十九}い ^百い
弟 ^一二 ^二十 ^三能 ^四名 ^五と ^六依 ^七じ ^八つ ^九り
あ ^一ま ^二か ^三ま ^四や ^五ま ^六ら ^七ー ^八み ^九ら ^十ー ^{十一}そ
あ ^一い ^二つ ^三い ^四つ ^五い ^六つ ^七い ^八つ ^九い ^十つ ^{十一}い ^{十二}つ ^{十三}い ^{十四}つ ^{十五}い ^{十六}つ ^{十七}い ^{十八}つ ^{十九}い ^{二十}つ ^{二十一}い ^{二十二}つ ^{二十三}い ^{二十四}つ ^{二十五}い ^{二十六}つ ^{二十七}い ^{二十八}つ ^{二十九}い ^{三十}つ ^{三十一}い ^{三十二}つ ^{三十三}い ^{三十四}つ ^{三十五}い ^{三十六}つ ^{三十七}い ^{三十八}つ ^{三十九}い ^{四十}つ ^{四十一}い ^{四十二}つ ^{四十三}い ^{四十四}つ ^{四十五}い ^{四十六}つ ^{四十七}い ^{四十八}つ ^{四十九}い ^{五十}つ ^{五十一}い ^{五十二}つ ^{五十三}い ^{五十四}つ ^{五十五}い ^{五十六}つ ^{五十七}い ^{五十八}つ ^{五十九}い ^{六十}つ ^{六十一}い ^{六十二}つ ^{六十三}い ^{六十四}つ ^{六十五}い ^{六十六}つ ^{六十七}い ^{六十八}つ ^{六十九}い ^{七十}つ ^{七十一}い ^{七十二}つ ^{七十三}い ^{七十四}つ ^{七十五}い ^{七十六}つ ^{七十七}い ^{七十八}つ ^{七十九}い ^{八十}つ ^{八十一}い ^{八十二}つ ^{八十三}い ^{八十四}つ ^{八十五}い ^{八十六}つ ^{八十七}い ^{八十八}つ ^{八十九}い ^{九十}つ ^{九十一}い ^{九十二}つ ^{九十三}い ^{九十四}つ ^{九十五}い ^{九十六}つ ^{九十七}い ^{九十八}つ ^{九十九}い ^百つ
ま ^一て ^二や ^三ま ^四い ^五つ ^六ら ^七ら ^八ら ^九ら ^十ら ^{十一}ら ^{十二}ら ^{十三}ら ^{十四}ら ^{十五}ら ^{十六}ら ^{十七}ら ^{十八}ら ^{十九}ら ^{二十}ら ^{二十一}ら ^{二十二}ら ^{二十三}ら ^{二十四}ら ^{二十五}ら ^{二十六}ら ^{二十七}ら ^{二十八}ら ^{二十九}ら ^{三十}ら ^{三十一}ら ^{三十二}ら ^{三十三}ら ^{三十四}ら ^{三十五}ら ^{三十六}ら ^{三十七}ら ^{三十八}ら ^{三十九}ら ^{四十}ら ^{四十一}ら ^{四十二}ら ^{四十三}ら ^{四十四}ら ^{四十五}ら ^{四十六}ら ^{四十七}ら ^{四十八}ら ^{四十九}ら ^{五十}ら ^{五十一}ら ^{五十二}ら ^{五十三}ら ^{五十四}ら ^{五十五}ら ^{五十六}ら ^{五十七}ら ^{五十八}ら ^{五十九}ら ^{六十}ら ^{六十一}ら ^{六十二}ら ^{六十三}ら ^{六十四}ら ^{六十五}ら ^{六十六}ら ^{六十七}ら ^{六十八}ら ^{六十九}ら ^{七十}ら ^{七十一}ら ^{七十二}ら ^{七十三}ら ^{七十四}ら ^{七十五}ら ^{七十六}ら ^{七十七}ら ^{七十八}ら ^{七十九}ら ^{八十}ら ^{八十一}ら ^{八十二}ら ^{八十三}ら ^{八十四}ら ^{八十五}ら ^{八十六}ら ^{八十七}ら ^{八十八}ら ^{八十九}ら ^{九十}ら ^{九十一}ら ^{九十二}ら ^{九十三}ら ^{九十四}ら ^{九十五}ら ^{九十六}ら ^{九十七}ら ^{九十八}ら ^{九十九}ら ^百ら

他唯々

亦二十二も乃假名のゆ。

とま二首一句はわまうこそくらああり

秋乃秋し月乃うつくもこのま

わう一はなれておまおまうま

あはそまうまおまうまうま

亦二十四や乃のまのゆ

や文字あまうあうらのかうらに及

まはう一のやまおまうまうま

月やあうらまやじう

亦二十日満乃事

いうて まうま

高城や東守乃英りれうたりや

あうてうまおわたうひかうら

親やうてと満ふくぬめ文字まうま

しうり

又月乃あうらうまおまうま

じうあうらの袖うまをすう

先ハ同卷ノ初一句の内ニ黄白ガリ

中二十又同字乃あり也

同字病としてて後ガ外と一首一白

はとれ無あり付し然となくたをへ
らうふとら物あもくはくこひを
くらまは物らんよまくせん

は内よ又文字ニハありてうかまうを
ましとて一首乃たの又文字

物おのふ袖らり落やハハ人

粘らせうをそそくぬ物とは

是も物乃字ニハあり是あり手ニ
物らかう物う此事い千百万はく
くこのうハ二十ぬヶ條如件

印よは傳乃茶書加へ付り

七ヶ条の事

中一 身乃字ふんあり也

中二 身乃字ふんあり也

中三 身乃字ふんあり也

中四 活とまり乃中

中五 よてのゆ 付 無名乃人

中六 ちうとまり乃中

中七 こちとまり乃中

中一 哉

福うひうれ 活とまり乃事あう

ねんくこどくこくわん 活とまり乃事あ

ひんくこくこくち 活とまり乃事あ

又てにこの事あり

めりまら乃る 活乃用也の終ひハ

ありふをり乃る 活乃ひきん乃事あ 是ては

又活乃一乃事

よす也てはうらなけうら乃事あ

わん乃のこち乃てはく 活乃事あ

月乃花乃ひ類はゆく 活乃後乃人

のりてあつふ 活乃ちやん乃ひ乃事

中傳乃七ヶ條乃中一乃事

中二乃事あはなはか乃事あ

み子板津代もさうにさる田川
うとれた舟の影もくればは
はいと宿りてのよたせしり

舟にすししのとがうらうら

是とくく味へく居が出雲よはまると山道
乃ちあつて又ひうけてにとの清濁みよ
つとるが乃ち替りつめま

みつ乃原もさうそたうあつて
りつとるが乃ち替りつめま

君よさうり我力をほしきあふれ
みとくきしとれりともさうら
かくとくふあやいらふまはさうと
さうとさしあともあつたれりいと

右三首乃清濁よく合点あり

舟四法ともありなり

山乃原もさうそたうあつて
りつとるが乃ち替りつめま
善くかくあつてりつとるが乃ち替りつめま

わろまきけそ月つるころ
まろ世さふとむんとさひく梅乃む
それとみよに書乃あつらる

白氏詩

琴詩酒友枕我皆比
雪月花時最憶君

は何とあま入らまきはとまりとらり
才又まて乃てにま
まろとみよとれいんむじり

それよりあはるはくま
秋澤崎あまうそ浪の志つらま
びくまあつら大和のそ
物いよまをれうこの別ま
れのううまはまことあのかま
嵐え花のあへ乃うまま
入お乃種乃ひくまの志つらま
産う川まゆり作乃のま
にてのままウクスツヌアムユルウ

ワラヤニハナタサ
イル井三七二千ニ

造らるるの字

名をその

大まら

あふたう

美しくその

右向

貞徳為得叱百額

あつりまき小町をくりや伊勢浦
伊勢小町あつりまき伊勢方よりなれ
今中よりあつりまきよせゆり

とこ乃益うりたりやるはくはまき
とこ乃益うりたりやるはくはまき
伊勢方とあつりまきのこと

あつりまきあつりまき八月末まで
あつりまきのことあつりまきのことあつりまき

一ノ白二の白切りそ能得よたり

あつりまきあつりまきあつりまき
あつりまきあつりまきあつりまき
あつりまきあつりまきあつりまき

あつりまきあつりまきあつりまき
あつりまきあつりまきあつりまき
あつりまきあつりまきあつりまき

あつりまきあつりまきあつりまき
あつりまきあつりまきあつりまき
あつりまきあつりまきあつりまき

あつりまきあつりまき

まゝありしを汲みならのり板
わよの手まよころやとわらあまより板を
とりたをいなり

勝清らんへふつはら院さう
まゝありとわらと勝位まより板を
とりわらとまねあまより向して
亭子位と和勝門乃ころこ西信一
業此对菅家いふいふあまよりあま
ころまはらまゝあまのころ

唯このあまよりころこと目の業
まゝあまの目業とまゝいふころこ
とりたをい

まゝありとまゝありのころこをたひら
法ありの款喜乃法勝つて付ら
くさひつと喰らるまゝ板とたくら
まゝありとまゝあり

板たうまゝ推のたうりれあまれさ
推まゝよりまゝあり推の板と板ま

下

廿九

たしなむるべし

志りくまへ大月心の月のりし
志りくまへくち志の敗れりまをうたり
推ハれぬりまをうたりてけりし

清室の傍や麻糸のぬらん
大月心たれまへあり乱れゆふ志りくまへ
懐路を十六のころまをうたりて
但守清室まをうたりし思ひ十六とまを
うりまへに疑也となりし

十六のころ書てうりしうりし
は作付あくまを

急なまありてまをうたりし福の露
まをうたりしはまをうたりし志りくまへ
りしまをうたりしはまをうたりし志りくまへ
花うりし根しとまをうたりし志りくまへ
枝と巻の字まをうたりし志りくまへ
より根とまをうたりし志りくまへ

賣りしとちりし門のうりし

根をこそ残しよとらりかたしはな
の世とてうらむらん

かきんころ大直にるよりきりて
そら大直しそりのあり奈保の名
とつら花ともよふしとて

陣ひやうらうらうらきとけり時
みくくち向のこ

城よりとあつらひうらひあつら
思乃基うらひとあつら

は勝よ其多とま入つら城と白

文は乃母やあつらとあつら
思と田乃畔よなをん
つらとあつらあつらあつらあつら
か信よたよて付よ情あつら

志やあつらあつらあつらあつら

膽形よあつら白骨とあつらあつら
の長を我中し向しとあつらあつら
あつらあつらあつらあつらあつら

そりのひんあんのめすしんらん
あつし菊とよしむ幸しうり
あらの章を越えくらよしり幸し
白さしきん

後ろしし物金との記の最
本のまりともすくくしり
夫智王のしり製の如くうり
秋山の志ししんあくの美の白む
秋山はもと本の字と付れん

よんうの美の皮とともあたり
しりちともりけりすいんら
しりちの秋の事すいんら
下戸より白れ書りり月と
白の書ハ西の別し
奇まのしりぬんのひんあく
世の流よ美福下戸よ美とさつ
知書乃とや書乃乃用かん
くらんとんのうしりす

井保の法号名のねをかう
くもさうらねんをてはせり
中とさうきんとりかひくく
つまひけり

くくさうらめ、物乃本
くもさうらと書後よる
奥とのと奥てのまり
奥といふ房坊の女の
ふき酒さや

酒やねんとのとさうき酒

鬼かきしとさうらとて
酒興さうらとさう

ねんさうらとさう
一と院乃は字とさ

物さうらとさう
酒さうらとさう

まわりとさうらとさ
人のせな酒のさうら

三十四

人の世をまじく宛池邊かりまよりか
とがかり花の原の花とつてあこ

松浦り事いせ家くもなり

新曲の音よりやうのまゝかゝるも

鶴とはいやしきうの石のうらむ

松浦り

昔かろ衆よりつらまゝい

鶴と持よさく衆くまゆの鶴つらひ

風流なりわ

四年六神よもつてせたりまむ

しり終りしう名月乃うけ

宵ま衆よりりたれは信者乃神

しうがわりしう

露やととわやうり交は定家

定家の信者の林を現かりて月

化とまてせり

肉まんましららつらつあま

或る月親ま

後人書の海乃をまきしは先りの
大平部は有少東飯より六は海のは
あつせんやうり

たとい大八何とくま
大八乃の海乃のりまのりま
碓井のそありととくまのりま
礼とたはし海乃のりまのりま
大八とま家のあつ海乃の種よる
伝名乃あつらふふあつし

所をよめ志よそ伝名乃とよ海を
らうくま

障礪とや師をの月乃天物丸
定のめつくと天物よるた

紅粉よ木乃葉乃あつくま
師を紅粉よ木の葉天物とるより
とやうくまの葉一少袖と務田川
つんまのりまのりまのりま
是ハ葉平の何月通ひのはま昔の娘

のちとどがけ用をこすうがし玄梅の
御りし

我より男乃刀ひんめいしく
力を刀乃力よりして男よりを
ふしすうし

あうきんの糸を解くうひする
生奥と夕念のうく精をわけ
生奥より解とそりたはく精をわ
どして後云はけへー

青のうらうら呼やあまの

難波のうらうら大文の月まてまて
ゆく云青もあまの海士のうらうら

難波のうらうら海井のあまを
しとゆまてとほきま乃極ら
しとゆも名を

秋の唯白子衣表と表くさ
月乃の衣表とく表白くし
いさくうらうらとくさや

下
三

ふみりふみ白手ぬき東さここまうし
キのめりふりたのものはつらきて
たのじろ親良法と名くそくきふらよ
めりりも無引してこのけりり
こころこころやうらりりめり
甲面のりりしけりこころ人たのためた
ふらつめきこころし
生善のゆりこころまてく善ふを徳とそ
ゆりこころのゆり生善のゆりまてくふ

くりかゆしと云俗徳家合用し
徳をのめり事とこころたうし
事とこころ事合し定風とかがま地
為業と人小善より入てとたわら
救ふ老いたんををぬて業と云とす
こころこころしと云くゆりこころめり
世俗は佛事と云はる茶と云らみこ
ろこころと云らと云くゆりこころぬ
かひたり

三十一

文を付ら落のやうなまひまきて
すまの胎し熱書と執りてまふ付
あし志はらひまうらうん

麻とねよらうし書あのをけり
あうの書あふあ物し我をれりあひ
まこらうしあらもあし

あうの書あふあ物し我をれりあひ
あうの書あふあ物し我をれりあひ
あうの書あふあ物し我をれりあひ

とくす

猶更なる書場よりす花のま
いりくさあまのいあうとあ
てはあはれし書とつあうし
書あを志のく名いあうし
百姓と富士せんやうにあま
うの書あはれし

はうあきたまふあはれし
はうあきたまふあはれし

らしせりぬの人らなまきりりぬふ
とらんがり

美濃仕立極の事 廿二日乃節の
は夏の節

- 一 立春 年乃内のまきいふよまきいふよま
いふよまきいふよまきいふよま
- 一 七月ハ 酉月乃節
- 一 八月ハ 酉月乃節
- 一 九月ハ 酉月乃節
- 一 十月ハ 酉月乃節
- 一 十一月ハ 酉月乃節
- 一 十二月ハ 酉月乃節

下

一わろこりー 甲金入るよ 沖書とむらり
よきまたり

一南条八幡の徳討入るよ 大南^テのあり
一わろまたりー 二月十日の法たう
よのそに金とて 京中れおるよまこへとわら
るよのそとさうこりせしむらゆへ

一巳月ノ板 三月上のこり日ありよきと
うろく棟たると日奉りよと詩とわらり
とらと曲ありよきとて三月三日よきと

一歌久きよの歌とくく 夜の歌とく
月一日たり

一梅花 あまよ花のゆりころよきと
一牡若 ありよきよ題よ入るよ連うよ
一ひかりの目 五月十日よきとた
のる傷の条たり

一わろまたりー 三月十日の法たう
一扇 ありとよきよありよきと
うろりれよとありよきよ

四三

- 一川社 あよま御方りと寝て交神宗と申
- 一石段 六月晦日はあまをさくひと平らに
総も海白くも思ふと川の石段八月と申
- 一七夕 天乃川と申れとより社を衣祓くひ
の系里合つるもさるゆいひ卯あまこ
ひたあまこ
- 一方おし心 社社とてと方おしめてと云
てと社もは三月と申
- 一鳩吹 社のもめふ鳩とてと人として鳩の

- 一 かくまひとて少く申とてあこ
- 一 玉糸 七月十五日の月とてあこ
- 一 相撲 ことりつうひとて大内のそい合
- 一 約定 ことり原のまきさる約と大内(あま)
八月十五日の事お取しとて勅使とてむ久
ゆくと云
- 一 東き 社(あま)とてむひとてあこ
- 一 物屋代 藩の物とて物(あま)社(あま)社(あま)
- 一 冬うまへ 山うまへは住居くまひするゆい

- 一 豊的 鹿舎 壬午年の稲と神よちあう後
きこしめりんゆよゆきぬ
- 一 ね衣 鹿舎の舞娘のまろ抱神祇遊
- 一 燈火 神木の村乃燈火に
- 一 燈子すむ 夕乃ゆきをくちあゆみきこ
- 一 鳥の音すむ 音を鳴きまわるとき
- 一 燈と燈盟 燈よあつと
- 一 悪ひ車 燈よあつとねふあつと
おつちハなとつとつと

- 一 蘭 神分あつとつと
とすかして空方にありとつとつと
- 一 為老入 燈よあつと
- 一 古者史 燈よあつとつと
むつとのあつとつと
- 一 古倉 古祇あつとつと
但つとつとつと
- 一 友なりとつとつと 六月よあつとつと
- 一 おつちハな乃地名なり

- 一 すみまじつじあきあつむいひつゝは物とあはれ
- 一 あつまつとくすなはしと六 琴のゆき
- 一 張ははとほく移らと六 あめのゆき
- 一 ひくさつと六 あめのゆき
- 一 ちやう乃後 六月のあきつひのゆきの
のなうは付てう
- 一 新夜と六 ちやう乃き夜と秋
- 一 雪乃袖と六 やしき袖とらふとくは
まよあつん

- 一 わつとと六 竹乃中おありまきとくは
あうなり物と六 ちやう乃すさちらさつり
さきえうなをしよ付てう
- 一 細代うら六 秋と麻とちやう乃付てう
治川田とちやう乃ちやう
- 一 流乃乃曲 三月三日と九月十日と
とちやう乃ちやうとちやう
- 一 公乃判と六 二月十五日と入城のゆき
又二月のあつとちやう

一園より西なり、三ツツ方傳へぬとせらるる月、園
 の名と付らハ、拙く園身園戸のひまひ
 けり、それハ、乃、名と

一花、こゝと、は、花、の、あ、り、の、ち、か、中、と、列、分
 花、の、り

一花、よ、ち、花、梅、よ、音、花、よ、文、梅、花、不、付、約

一花、ら、る、と、し、な、ま、ま、と、あ、る、よ、本、の、り、と、は、
 花、の、り、と、付、り、同、く、と、し、る、ら

一花、の、は、花、乃、は、乃、花、乃、と、も、と、し、る、は、

心、か、と、の、ら、う、く、ん、ゆ、と、ま、ま、へ、一、是、と、う、
 と、す、ら、ら、れ、し、り

一花、ら、る、ふ、秋、の、さ、落、入、事、付、り、同、く、と、し、

一月、と、ま、ま、秋、の、花、と、あ、り、し、り、付、り、同、く、と、し、

一月、乃、花、花、乃、乃、花、乃、乃、花、乃、乃、花、乃、
 花、の、花、と、ま、ま、と、正、花、の、花、の、花、の、花、の、
 二、乃、ハ、

一花、よ、ち、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、

一花、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、

一 紅糸少一 つきと石付人山本と書き也
とらむし少一付冬と

一 海之扇と付る計燈になくきと云にあり
とまねて同とよかりある二句

一 困かりと云あるよ風吹る心神向と
書と云字よ衣敷又一席子馬方又一

一 五乃字 露ニは藤枝乃内ニ一巻物乃一
柄と云字 柄本の乃一袖ニ

一 際と云字 露河内乃一花は玉巻の乃一

一 為と云字 雪あ乃乃乃ニ衣袖の乃ニ

一 鳥の乃ニ 鳥乃の乃向と過

一 赤まの乃一 乃乃乃と云くくく
むまの乃一 乃と云ん乃きあ

一 翠と云字 乃乃乃と云くくく
まの乃一 乃乃乃と云くく

一 意の乃 乃乃乃と云くくく
ら乃一

一 と云乃乃乃

一 一のいんていよわまらねのちんまふらふら
 くらまき長まにんし
 一 一のいんていよわまらねのちんまふらふら
 くらまき長まにんし
 一 ひろく一
 一 捨るとえ字四つおとく
 一 ぬの字四つおとく
 一 山里の外少字次千のるよ又一
 一 山陰の外少字次千のるよ又一

一 孫是 袖折十句し内^ニロと迷憶のん
 少くし故
 一 炭^又を^山の^内面とさうぬる
 一 尾^上よ^さ採^面とさうぬる^又又^山
 よう採^面と
 一 直^方少^の例^面とさうぬる
 一 山^中採^面とさうぬる
 一 二百^二百^二日^日が^たた^た字^よ目^不通^く
 一 一^と世^よま^ま面^とさうぬる

下
 四十八

- 一 卯のウニクナリクニ
- 一 新素新よこまき
- 一 十四句めよ月夜はまろく申念自死子
白子とよまき人功其かしくハ不及是地
- 一 横川 地ろろこ山程
- 一 西よ育る夕立雨の村あろる地こ山程の
少り地ハ武自のこくころあろるへー
- 一 湯とろそで碑とろこ蓋地若くろろろへー
- 一 ころの里乃みろまき地

- 一 源山よあろまきこる
- 一 花と宿月と宿居あろろ
- 一 豊とあろ極和よあろ
- 一 西に叢はさ不付
- 一 歌又子不付鳥歌よこ
- 一 布あの中道溪谷の古た志望の山越地
- 一 山修あろりハ旅のこ
- 一 けあろろる備あ
- 一 わさこる備あ

下

四七

- 一 笛とまのの折越よ琴の音倍の道をも不徒
- 一 朽木地柳の煙本柳の音
- 一 秋の枝のさく 秋の本の葉のまをさく
- 一 春の雨と秋のまをさく月のまの雨とあつた
- 一 煙霞青雲をさくふけらるりさく
- 一 夕の地垂る
- 一 法は舟のさくは舟のまは法付のさく
- 一 さくさくさく
- 一 さくさくさくのりらるるは舟のまをさく

うぐい

- 一 道よ玉洋枝のさくは枝のまをさく
- 一 火のまをさくは火のまをさく
- 一 雲の袖のまをさくは雲のまをさく
- 一 雲の袖のまをさくは雲のまをさく
- 一 雲の袖のまをさくは雲のまをさく
- 一 雲の袖のまをさくは雲のまをさく
- 一 雲の袖のまをさくは雲のまをさく
- 一 雲の袖のまをさくは雲のまをさく
- 一 雲の袖のまをさくは雲のまをさく

一 舟の三つめは釣車牛不付の船とて糸
地乃たるひまら

一 糸三つ

一 袋三つ

一 風よ多そそとけて多敷の馬神を討

一 日乃うつろ又日のさす一は

一 葵植る百にひらひをさるる神紙

一 栞白意(神紙)

一 松山歌(松川松人松木旭露白紙)

柳

一 本乃桑よおの多とてハ松

一 花の白ひと桃香うら西よわり

一 小藤 弟乃内よ入

一 信字 みりこり

一 蓮生儀身生生の字入てハ葉の三白

一 ちりよらに三白をれとさるは月

一 くらくくハ 兼ふ

一 ちりよらに三白をれとさるは月

一 くらくくハ 兼ふ

五十一

- 一 新乃草並和し若草乃新ハ他指也
- 一 痛急の雲ハ風神よ二句
- 一 御後ハ本綿もくくみの字付白も不短公
非紙
- 一 甲よあせくららせ付。
- 一 莫よ細少一四句
- 一 惹乃袖糸の紋他衣也
- 一 後の面よ三日月の時多付と付て八句
らす赤織も同也

- 一 貞といふ字用は平人のたゞとて
あり
- 一 更と云ねかて云巻ておよ二句
- 一 引よゆゑ二句白後と書有
- 一 草花他指物程扱と書有又藤花指
物よあり
- 一 意乃中川他ある色但句神よ二句
- 一 他の西人と云字よ二句
- 一 乃字おありたと川合て

一泊蓬子置物指所

一白字打子二つと喜と有

一糸結あゆみ子喜

ねん 西とさうぬはらん白あ

一袖さゆり月乃らあけさるるあは

一後編と圓修二白他意縁止後ハあ

一物よそしり二白

一今あひ夕時さう鳴二白唱句

一表一り表一

一あらしこいで候のあらしあ

一あらしのあらしのあらしのあらし

付二白(風は舞の付、舞人も持ん礼後

うと打)

一海よあらしのあらしのあらしのあらし

あらしのあらしのあらしのあらし

あらしのあらし

一貝あらしのあらしのあらしのあらし

一場よあらしのあらしのあらしのあらし

- 一 少と後をくねる
- 一 表裏のくねる
- 一 五的は月七と短く
- 一 里の海士に居る
- 一 懐くくくくくくく
- 一 弟よ云々
- 一 云乃云々
- 一 とくこの鳥
- 一 八百の字期

- 一 夕よわけの
- 一 表と月
- 一 らく
- 一 一川よ
- 一 独よ
- 一 赤の字
- 一 糸
- 一 一羽鳥
- 一 軒

下
五十四

乃事ありてんくしん

一むかひしつるは世の字付句とてぬらうな

まよふ世の字付句

一岩橋ありて久米の岩橋山程に相ある

一天川逢ふる半分し七夕の夜を

一春よ作らるる山程ありて山の字のあり

一色よるるの字のあり

一霞の字よ外なる

一次たの字あり林に

一流剛ありて乃新に

一とよは後付句と不始

一ととわめらうれあきとむすのりて伝う

うきめ少徳のんあり

一九字の字の字ハを橋本西よなり

一たう是とけある草花本ありととりん

激て交際く見えんあり

一鳥のころちのころとハなる鳥の字とせ

一守るは中の字世の中此中なる字よなる

山程

一草造 束分しあひりしる藤けりる巻

よわしと

一糸糸 物命し朝倉よりあ

一風つりり夜し昔は南乃風吹く白ひ糸

ふしりりしりりし

一うすら便と書しこ白いぬわく西の巻

巻し物し便置くん同あ物となりし

便にりりし

一巻のよ袖たりしわて付衣針の巻

一巻のよ袖たりしハて付

一いつりりとありて軍と付松竹のまより古巻

一極多よわたり終り又わくそこの巻よ又

一巻外よゆりわたり

一巻乃らうす橋は急ぎまよ袖わたり急ぎ但

急ぎ急ぎ

一氏乃らゆし巻あまわしと

一七つよ夕乃あくらしりかきと

一夕急よ夕のまひるまのまよる巻急ぎ急ぎ

下

巻六

一 個毎地帯分路

一 之 際 宛 止 云 々 之 付 不 過 一 二 三 之 路

と云ふ

一 戸 内 分 局 之 際 宛 止 之 付 不 過 一 二 三 之 路

一 馬 之 路 宛 止 云 々 之 付 不 過 一 二 三 之 路

と云ふ (只 一 二 三 之 路)

一 形 中 之 界 宛 止 同 意

一 一 方 宛 止 一 二 三 之 路 宛 止 同 意 又 宛 止 同 意

一 形 宛 止 一 二 三 之 路 宛 止 同 意 又 宛 止 同 意

一 一 方 宛 止 一 二 三 之 路 宛 止 同 意 又 宛 止 同 意
と云ふ (只 一 二 三 之 路)

一 道 宛 止 一 二 三 之 路 宛 止 同 意

一 形 宛 止 一 二 三 之 路 宛 止 同 意 又 宛 止 同 意

但 字 之 道 只 一 二 三 之 路

一 形 宛 止 一 二 三 之 路 宛 止 同 意 又 宛 止 同 意

一 形 宛 止 一 二 三 之 路 宛 止 同 意 又 宛 止 同 意

一 形 宛 止 一 二 三 之 路 宛 止 同 意 又 宛 止 同 意

一 別乃字 抄より二つ

一 喜茶 類

一本乃 自らより二文字面と居る 但字紙の

時より 西論抄より二文字面と居る

一 庭の字 園を思ふや 音を抄より二文字

一 おとよ 喜法 二文字

一 船多 地ある意

一 入らと ありて 夕白わたり

一 ころり 海より 筆に 終付 今より 比 筆の 終り

一 苦火 地ある意 地抄に 苦火の 抄より

一 埋火 類分

一 秘く 秘より 二文字

一 善乃 漆地ある意 善乃 善乃 漆地の 漆向

一 乃と 志る 意あり あり 志る 志る 志る

一 石より あり

一 真野 入に 志る 同野の 漆原 大和 野

一 野 漆原 漆原 志る 野 漆原 野

一 山鳥 字より 地あり

い本の戸松乃産松乃門毒の戸松乃
毒乃戸の松乃

一梅松乃の松乃の月

一松乃の戸の松乃の月

一松乃の戸の松乃の月

一月の戸の松乃の月

一月の戸の松乃の月

一月の戸の松乃の月

一月の戸の松乃の月

一年一松乃の松乃の月

一松乃の戸の松乃の月

一月の戸の松乃の月

一松乃の戸の松乃の月

一松乃の戸の松乃の月

一松乃の戸の松乃の月

一松乃の戸の松乃の月

一松乃の戸の松乃の月

松乃の戸の松乃の月

- 一 晴之乃乃の字山をのりよ付白媽ふ
- 一 夕之系系たぐ夕乃弟也
- 一 雲乃上松力とるんてい二句
- 一 霞字もふ歎いふらぬとて
- 一 焼と云字すくやく畑焼焼たふと云
- 一 久とく一雫よ二あり
- 一 水乃乃の面と月乃少媽下はらうとら
- 一 ひ月かこ
- 一 忌と云はなはなと云はなはなと云はなと

乃のし

- 一 根の字鳥よ二乃か又二急の字同か
- 一 干字よ塩抄と媽ふ所石とこの歌は本也
- 一 岩道居ふよ付白媽ふ岩乃たより計
- 一 急の戸物居ふ乃一俵計
- 一 急ありりくふかとり二句
- 一 圓守 守字抄媽ふ
- 一 うのまき二つとまき一急の急嬢と云よ
- 一 灯あり抄よ急と云と云と云

下

下

一鳥島よ鳥島よいんいんぬ
 一又書しこりたる書はわ
 一海さよ文ハニ百
 一こそおれ書てしりあり
 一あかぬよ何ふりま
 一乃まよ 海は神ニ百
 一たしきや 一たしきよ 一申よ
 一取しと云何名あうり 一あうりあうり
 一たしきよいんいんぬいんいんぬ

一とていんいんぬいんいんぬ
 一さき
 一あやのしめとハニ百
 一たしきよ 北人海作よふり夕時命よニ
 一白朝時よふり
 一初乃字 ねとね
 一秋文よ夕よいんいんぬ
 一あかの神
 一鶴とつるよまきとけり事た
 一

らうひしうすのゆい

一 昭名よ忠石付ふるよ忠石うい合

一 大井よ井向か

一 小塩よ小松向か

一 井しゆんよ志くめそ

一 それうわらぬうらうたの字二

一 里村乃白よ松竹乃松又あらの松付松也
すこらまわく

一 海よまの野鳥あて付想ふ物まはら

よ末乃まきとや付物松の道々よ末の松
のこいお付た味わくくの時言遠

一 周伽よあふ付

一 本枯よ本乃字二

一 松よ松よしとくくうらうらなたつと
松交まうてあかあ

一 花よ花よじとくくうらうらなて花交ま
てあかあ

一 葉よ葉よじとくくうらうらな

一 鷺よ 熟ふじとひらうらと交し

一 雲よ 芳じとひらうらと交し 昔の国をのみ
うらうらのせり

一 花中しとらふ月とむとひらうらと交し

一 武蔵野よ 春のつとけりたれよ 武蔵野

と云ふをのみ 春のつとけりたれよ 武蔵野

一 日吉乃 里小越後とけりたれよ 武蔵野

後規の四つとらうらと交し

一 意よ 春のつとけりたれよ 武蔵野

るさめし

一 雲の夜よ 毎夜と交し

一 年のとらり 秋のつとけりたれよ 武蔵野

乃とらり 秋のつとけり

一 水色 春のつとけりたれよ 武蔵野

鴨あ乃とらり

一 花のつとけりたれよ 武蔵野

一 春のつとけりたれよ 武蔵野

一 春のつとけりたれよ 武蔵野

りこ白つく白く付白針

一ゆふ草つらうらうら

一ゆふ草つらうらうら

一祝云乃もいふよ嬉む藤衣はつらうら

桃糸衣造于山 梅苔 雲苔 苔の境

侍乃一考 書出文 海よき道 袖のを

但深き乃のわい 一うらひのまは 世名の煙 爲の

遠考 山乃雲 ひとりゆく旅 力と

まつ心

三ノ...

一連歌乃病のゆ

山陰を月もや新乃くすん

うけと云字 碧りくまはたうらま

字乃病なり

一うこの病乃ゆ

月もふいふと花のくりり

月乃新も花よあくはれいそ

いあむ病く花よくりりはたりうら

らうらうらゆくとまはたうら

六十五

下
名付て片巻の病とは云し片巻の連歌
と云ふ也

一落白乃病の事

夕暮はまられ一花と月よそ
是の又花をなかりし一葉のたうと云
花月何色りままううと云し
喜は花結六月と用ゆるまうは
月なるん時の衆の花はつこは
ついでにゆくまうは落題と云

と云へ月前花とと巻のりて月丸
かうんはいう中よ二川の物と巻巻
してことと云はるまうと落巻とは
云し事よは八巻と云し事よは
あよもは落巻と云きてついで

右條之出入違申候りゆの所無相違の
はじりもや前句の付所も一頁
仕立しけりお違とは不是とお察
作也宗而宗紙の佛部のみんま
なりしは未代の連歌とすめん
るの書物とありし抄一とらお

此書主人の意よりなる書物と
あるは是の事ありと記すと不
分き所作間隠言事の内身と
まじりし也

永祿四年十一月廿日
宗卷五判
昌休五判

下

八十一頁

天水下卷之終

寬文十一^辛亥初冬吉日

四象坊門

水田甚在^{坊門}

古町

水田屋^{古町}乃^{古町}是^{古町}



